

I 果樹主要害虫のフェロモントラップによる誘殺消長

1 フェロモントラップ調査データの活用法

(1) 防除適期の考え方

フェロモントラップ調査データから、成虫発生時期を把握し、その後に現れる幼虫発生時期を予測し、的確に防除を行うことができます。特に、被害許容密度が低い害虫で有効です。

(2) 複合交信攪乱剤（コンフューザー）使用ほ場

複合交信攪乱剤使用ほ場では、フェロモントラップに雄成虫が誘引されなくなり、発生動向の観察ができなくなるため、フェロモントラップ調査データは発生動向を調査する手段として使用することができなくなります。

表1 複合交信攪乱剤の概要

製剤名	適用作物	適 用 害 虫
コンフューザーA	リンゴ	キンモンホソガ、モモシクイガ、ナシヒメシクイ、リンゴコカクモンハマキ、リンゴモンハマキ、ミダレカクモンハマキ
コンフューザーR	果樹類	モモシクイガ、ナシヒメシクイ、リンゴコカクモンハマキ、リンゴモンハマキ、ミダレカクモンハマキ
コンフューザーMM	果樹類	モモハモグリガ、ナシヒメシクイ、リンゴコカクモンハマキ、モモシクイガ
コンフューザーN	果樹類	モモシクイガ、ナシヒメシクイ、リンゴコカクモンハマキ、リンゴモンハマキ、チャノコカクモンハマキ、チャハマキ、スモモヒメシクイ

2 主要害虫の生態と誘殺消長

(1) ナシヒメシクイ

生態と防除時期

(ア) 本県における通常の成虫発生盛期は年4回です。

(イ) 誘殺最盛日からそれに続く次世代の薬剤散布適期までの日数は、次のとおりです。

表2 ナシヒメシクイの発生消長と防除適期

成虫の世代	発蛾最盛期	誘殺最盛日から次世代の薬剤散布適期まで日数	発生消長の特徴
越冬世代	5月上旬ころ		ピークが比較的明瞭
第1世代	6月下旬ころ	12～22日	
第2世代	7月下旬ころ	7～9日	
第3世代	8月下旬ころ	ピーク直後	



(2) リンゴモンハマキ・リンゴコカクモンハマキ

生態と防除時期

(ア) 本県における通常の成虫発生盛期は年3回ですが、年次により2週間程度前後することがあります。

(イ) 防除適期は幼虫ふ化期なので、幼虫ふ化最盛期ないしその後数日のうちに行います（若齢幼虫期の防除が効果的）。特に、第1世代は発育がよく揃うため効率的に防除できます。



表3 リンゴモンハマキ・リンゴコカクモンハマキの発生消長と防除適期

成虫の世代	発蛾最盛期	誘殺最盛日から次世代の薬剤散布適期まで日数	発生消長の特徴
越冬世代	5月下旬		成虫最盛期から2～3日後が産卵最盛期
第1世代	7月中～下旬	12日後	
第2世代	9月上旬	10日後	

(3) キンモンホソガ

生態と防除時期

(ア) 本県における通常の成虫発生盛期は年5回です。

(イ) 幼虫の葉への食入防止を主体に防除します。

(ウ) フェロモントラップによる誘殺消長から防除適期を判断するには、各世代の発生ピーク時より、各世代の区切りとなる谷の時期の把握が重要となります。具体的には、発生消長の谷から次世代の誘殺が認められたらすぐに実施するのが良いと考えられています。

表4 キンモンホソガの発生消長と防除適期

成虫の世代	発蛾最盛期	誘殺最盛日から次世代の薬剤散布適期まで日数	発生消長の特徴
越冬世代	4月下旬		第2世代以降（7月下旬～）は切れ目なく発生が続く
第1世代	6月中旬		
第2世代	7月下旬		
第3世代	8月中～下旬		
第4世代	9月下旬		

II チャバネアオカメムシ集合フェロモンおよび予察灯による果樹カメムシ類の誘殺消長

1 トラップ調査データの活用法

(1) 防除対策の基本的考え方は、飛来時期・期間や飛来量の正確な予測が重要となります。

(2) 越冬密度と越冬明け成虫の関係から、越冬密度が極めて低いときにはその後の個体数も少ない傾向となります。しかし、越冬密度があまり高くない場合でも、餌植物量（スギ・ヒノキの毬果量等）、気象要因などにより、果樹園へ飛来する恐れがあるため、薬剤防除が必要になることがあります。



(3) 樹園地への飛来量が増加してから殺虫剤を散布しても効果は期待できません。よって、最初の飛来による園内への定着をいかに抑えることができるのかが、防除を成功させるための最大のポイントになります。

2 予察灯調査データの活用法

毎年、同じ条件で誘引した害虫相を調査できるので、発生量の年次比較などには有効です。また、飛びまわっている成虫が誘引されるので、大まかな発生量を把握することができます。